

広津氏に答う

有島武郎

青空文庫

私が正月号の改造に発表した「宣言一つ」について、広津和郎氏が時事紙上に意見を發表された。それについて、お答えする。

広津氏は、芸術は超階級的超時代的な要素を持っているもので、よい芸術は、いかなる階級の人にも訴える力を持っている。それゆえ私が芸術家としての立場を、ブルジョア階級に定め、その作品はブルジョアに訴えるために書かれるものだと、宣言したに対して、あまりに窮屈な平面的な申し出であると言つていられる。芸術に超階級的超時代的の要素があるのは、広津氏を待たないでも知れきつた事実である。その事實は芸術に限られたことでもない。政治の上にも、宗教の上にも、その他人間生活のすべての諸相の上にかかる普遍的な要素は、多いか少ないかの程度において存在している。それを私は無視しているものではない。それはあまりに明白な事實であるがゆえに、問題にしなかつただけのことだ。

私の考えるところによれば、おのずから芸術家と称するものをだいたい三つに分けることができる。第一の種類に属する人は、その人の生活全部が純粹な芸術境に没入している人で、その人の実生活は、周囲とどんな間隔があろうと、いつこうそれを気にしない。そ

うして自己独得の芸術的感興を表現することに全精力を傾倒するところの人だ。もし、現在の作家の中に、例を引いてみるならば、泉鏡花いづみきぎょうか氏のごときがその人ではないだろうか。第二の人は、芸術と自分の実生活との間に、思いをさまよわせずにはいられない人たちの人である。自分の芸術に没入することは、第一の人のようにあることはどうしてもできない。自分の実生活と周囲の実生活との間に或る合理的な関係をつくらなければ、その芸術すら生み出すことができないと感ずる種類の人である。第三の種類に属する人は、自分の芸術を実生活の便宜に用いようとする人である。その人の実生活は周囲の実生活と必ずしも合理的な関係にある必要はない。とにかく自分の現在の生活が都合よくはこびうるならば、ブルジョアのために、気焰きえんも吐こうし、プロレタリアのために、提灯ちようちんも持とうという種類の人である。そしてその人の芸術は、当代でいえば、その人をプティ・ブルジョアにでも仕上げてくれれば、それで目的をはたしたと言ってもいいような芸術である。芸術家というものの立場より言うならば第一の種類の人是最も敬うべき純粋な芸術家であり、第二の種類の方は、芸術家としては、いわゆる素人しろうと芸術家をもって目さるべきものであり、第三の種類の方は悪い意味の大道芸人とえらぶ所がない人である。

ところで、私自身は第一の種類に属する芸術家でありうるかというのに、不幸にしてそ

うではない。私は常に自分の実生活の状態についてよくよくよしている。そして、その生活と芸術との間に、正しい関係を持ちきたしたいと苦慮している、これが私の心の実状である。こういう心事をもつて、私はみずからを第一の種類の芸術家らしく装うことはできない。装うことができないとすれば、勢い「宣言一つ」で発表したようなことを言わねばならぬのは自然なことである。「宣言一つ」には、できるだけ平面的にものを言ったつもりだが、それでもわからない人にはわからないようだから、なおいつそう平面的に言うならば、第一、私は来たるべき文化がプロレタリアによって築き上げらるべきであり、また築き上げられるであろうと信ずるものである。ブルジョアジーの生活圏内に生活したものは、誰でも少し考えるならば、その生活が、自壊作用をひき起こしつつあることを、感じないものはなからう。その自壊作用の後に、活力ある生活を将来するものは、もとよりアリストクラシーでもなければ、富豪階級でもありえぬ。これらの階級はブルジョアジー以前に勢力をたくましくした過去の所産であつて、それが来たるべき生活の上に復帰しようとは、誰しも考えぬところであろう。文芸の上に階級意識がそう顕著に働くものではないという理窟は、概念的には成り立つけれども、実際の歴史的事実を観察するものは、事実として、階級意識がどれほど強く、文芸の上にも影響するかを驚かすにはいられまい。そ

れを事実を意識したものが文芸にたずさわろうとする以上は、いかなる階級に自分が属しているかを厳密に考察せずにはいられなくなるはずだ。

しからば、来たるべき時代においてプロレタリアの中から新しい文化が勃興するだろうと信じている私は、なぜプロレタリアの芸術家として、プロレタリアに訴えるべき作品を産もうとしないのか。できるならば私はそれがしたい。しかしながら、私の生まれかつ育った境遇と、私の素養とは、それをさせないことを十分意識するがゆえに、私は、あえて越ゆべからざる埒^{らち}を越えようと思わないのだ。私のこんな気持ちに対する反証として、よくロシアの啓蒙運動が例を引かれるようだ。ロシアの民衆が無智の惰眠をむさぼっていたところに、いわゆる、ブルジョアの知識階級の青年男女が、あらゆる困難を排して、民衆の蒙^{ひら}を啓^{ひら}くにつとめた。これが大事な胚子^{はいし}となつて、あのすばらしい世界革命がひき起こされたのだ。この場合ブルジョアの人々が、どれだけ民衆のために貢献したかは、想像も及ばないものがある。悔い改めたブルジョアは、そのままプロレタリアの人になることができるのだ。そう、ある人は言うかもしれない。しかし、この場合における私の観察は多少一般世人と異なっている。ロシアの民衆はその国の事情が、そのまま進んでいったならば、いつかは革命を起こすに、ちがひなかつたのだ。

インテリゲンチヤの啓蒙運動はただいくらかそれを早めたにすぎない。そして、それを早めたことが、實際ロシアの民衆にとつて、よいことであつたか、悪いことであつたかは、遽にわかに断定さるべきではないと私は思うものだ。もし、私の零細な知識が、私をいつわらぬならば、ロシアの最近の革命の結果からいうと、ロシアの啓蒙運動は、むしろ民衆の眞の勃興にさまたげをなしていると言つても差し支えないようだ。始めは露国のプロレタリアのためにいかにも希望多く見えた革命も、現在までに收穫された結果から見ると、大多数の民衆よりも、ブルジョア文化によつて洗礼を受けた歸化的民衆によつて收穫されている。そして大多数のプロレタリアは、帝政時代のそれと、あまり異ならぬ不自由な状態にある。もし、ブルジョアとプロレタリアとの間に、はじめから渡るべき橋が絶えていて、プロレタリア自身の内発的な力が、今度の革命をひき起こしていたのならば、その結果は、はるかに異なつたものであることは、誰でも想像するに難くないだろう。

しかしこうはいつたとて、實際の歴史上の事実として、ロシアには前述したような経路が起こり来たつたのだから、私はその事実をも否定しようとするものではない。ブルジョアジーをなくするためには、この階級が自己防衛のために永年にわたつて築き上げたあらゆる制度および機関（ことに政治機関）をプロレタリアの手中に収め、ほこ矛を逆にしてブル

ジョアジーを亡滅に導かねばならぬ。ブルジョアジーが亡滅すれば、その所産なるすべての制度および機関はおのずから亡滅して、新たなる制度および機関が発生するであろうとは、レニン自身が主張するところで、実際において、歴史的事実としては、かくのごとき経路が今行なわれつつあるようだ。無産者の独裁政治とは、おそらくかかるものを意味するのである。まことに一つの生活様式が他の生活様式に変遷する場合において、前代の生活様式が一時に跡を絶つて、全く異なつた生活様式が突発するという事実はない。三つの生活様式の間色をなす、過渡期の生活が起滅する間に、新しい生活様式が甫はじめて成就されるであろう。歴史的に人類の生活を考察するとかくあることが至当なことである。

しかしながら思想的にかかる問題を取り扱う場合には必ずしもかくある必要はない。人間の思想はその一特色として飛躍的な傾向をもっている。事実の障しょうがい礙がいを乗り越して或る要求を具体化しようとする。もし思想からこの特色を控除したら、おそらく思想の生命は半ば失われてしまうであろう。思想は事実を芸術化することである。歴史をその純粹な現われにまで還元することである。蛇行だこうして達しうる人間の実際の方向を、直線によって描き直すことである。もし社会主義の思想が真理であつたとしても、もし実行という視角からのみ論ずるならば、その思想の実現に先だつて、多くの中間的施設が無数に行なわれ

ねばならぬ。いわゆる社会政策と称せられる施設、温情主義、妥協主義の実施などはすべてそれである。これらの修正策が施された後に、社会主義的思想ははじめて実現されるわけになるのだ。それならば社会政策的の施設する未だ行なわれようとはしなかった時代に、何を苦しんで社会主義の思想は説かれねばならなかったか。私はそれに答えて、社会主義はその背景に思想的要素をたぶんに含んでいたからだといわねばならぬ。そしてこの思想がかくばかり早く唱えだされたということは、決して無益でも徒労でもないといいたい。なぜならば、かくばかり純粋な人の心の趨^{すうこう}向がなかったならば、社会政策も温情主義も人間の心には起こりえなかつたであらうから。

以上の立場からして私は思想的にいたい。「来たるべき文化がプロレタリアによつて築かれるものならば、それは純粋にプロレタリア自身が有する思想と活力とによつて築かれねばならぬ。少なくともそういう覚悟をもつてその文化を築こうという人は立ち上がりねばならぬ。同時に、その文化の出現を信ずる者にして、躬^みずからがその文化と異なった生活をしていることを発見した者は、たといどれほど自分が扱^よつてもつて生活した生活の利点に沐浴^{もくよく}しているとしても、新しい文化の建立に対する指導者、教育者をもつてみずから任ずべきではなく、自分の思想的立場を納得して、謹んでその立場にあることをもつ

て満足しなければならぬ。もし誤つて無思慮にも自分の埒らちを越えて、差し出たことをするならば、その人は純粹なるべき思想の世界を、不必要なる差し出口をもつて混濁し、なんらかの意味において實際上の事の進しん歩ちよくをも阻礙そがいするの結果になるだろう」と。この立場からして私は何といつても、自分がブルジョアジーの生活に浸潤しきつた人間である以上、濫みだりに他の階級の人に訴えるような芸術を心がけることの危険を感じ、自分の立場を明らかにしておく必要を見るに至つたものだ。そう考えるのが窮屈だというなら、私は自分の態度の窮屈に甘んじようとする者だ。

私のいつた第一の種類に属する芸術家は階級意識に超越しているから、私の提起した問題などはもとより念頭にあるうはずがない。その人たちにとっては、私の提議は半顧の価値もなかるべきはずのものだ。私はそれほどまでに真に純粹に芸術に没頭しうる芸術家を尊もう。私はある主義者たちのように、そういう人たちを頭から愚物視することはできない。かかる人はいかなる時代にも人間全体によつていたわられねばならぬ特種の人である。しかし第二の種類に属する芸術家である以上は、私のごとく考えるのは不当ではなく、傲ご慢うまんなことでもなく、謙遜けんそんなことでもなく、爾しかあるべきことだと私は信じている。広津氏は私の所言に対して容喙ようかいされた。容喙ようかいされた以上は私の所言に対して関心を持たれ

たに相違ない。関心を持たれる以上は、氏の評論家としての素質は私のいう第一の種類に属する芸術家のものであることはできないのだ。氏は明らかに私のいう第二か第三かの芸術家的素質のうちのいずれかに属することをみずから証明していられるのだ。しかもその所説は、私の見る所が誤っていないなら、第一の種類に属する芸術家でも主張しそうなことを主張していられる。もし第一の種類に属する芸術家がそれを主張するようなことを仮想したら、(その芸術家はそんなことを主張するはずはないけれども)あるいはそれは実感として私の頭に響くかもしれない。しかしながら広津氏の筆によって教えられることになると、私にはお座なりの概念論としてより響かなくなる。なぜならば、それは主張さるべからざる人によって主張された議論だからである。

さらに私の芸術家として作品を生かそうとする意味はどこにあるかということについては、「改造」誌上で一とおり申し出ておいたから、ここには再言しない。なにしろ私私の実情から出発する。私がもし第一の芸術家にでもなりきりうる時節が来たならば、この縷説は鶏肋にも値せぬものとして屑籠くずかごにでも投げ終わろう。

青空文庫情報

底本：「惜しみなく愛は奪う」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年1月30日改版初版

1979（昭和54）年4月30日発行改版14版

初出：「東京朝日新聞」

1922（大正11）年1月19日

入力：鈴木厚司

1999年2月13日公開

2005年11月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

広津氏に答う

有島武郎

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>